

パネルディスカッション

平城宮跡の過去・現在・未来

コーディネーター

本中 眞 奈良文化財研究所 所長

パネリスト

佐藤 信 東京大学 名誉教授
神野 恵 奈良文化財研究所 都城発掘調査部 平城地区考古第二研究室長
岩戸 晶子 奈良文化財研究所 企画調整部 展示企画室長
中村 孝 国土交通省近畿地方整備局 国営飛鳥歴史公園事務所長
山下 信一郎 文化庁 文化財第二課長
中村 俊介 朝日新聞社 大阪本社 編集委員

コメンテーター

武内正和 奈良県 文化・教育・くらし創造部 理事



奈コ
コーディネーター : 本中 眞



パネリスト : 佐藤 信



パネリスト : 神野 恵



パネリスト : 岩戸 晶子



パネリスト : 中村 孝



パネリスト : 山下 信一郎



パネリスト : 中村 俊介



コメンテーター : 武内 正和

【本中（コーディネーター）】

これまでの基調講演、研究員のプレゼンテーションを踏まえ、これから約 1 時間はディスカッションの場したいと思います。

まず、ディスカッションのテーマですが、冒頭にも少し申し上げたように、「平城宮跡史跡指定 100 周年」という節目にあたり、まず、私たちはその歴史に何を学び、未来に何を展望するのか。第二に、私たち奈文研の職員

が 70 年間にわたって平城宮跡という非常に広い土地をフィールドとして調査研究を進めてきたわけですが、今後はどのように関わっていくべきなのか。今日の基調講演やプレゼンテーションの中にその答えが潜んでいたのではないかと思います。それらをディスカッションの中でさらに深めていこうと思います。

また、今日この会場にお集まりの方々はもちろん、地域の人々、そして全国各地、さらには世界中の人々、平城宮跡を訪れたことのある人もそうでない人も含めて、人と平城宮跡との関わり方はいかにあるべきなのか、人々の要請に対して奈文研はどのように応えていけばいいのかということについても、テーマの柱になってくるのであらうと思います。

今日は冒頭、基調講演として、佐藤さんからご講演をいただきました。その中で、平城宮跡のフィールドは基礎的な研究と先端的な新研究、新分野の研究・開拓の両面に依拠してきたのでは

最先端な新研究、新分野の研究・開拓

ないかというお言葉をいただきました。

平城宮跡をフィールドとする営みは、佐藤さんは「奈良学」という言葉を使われましたけれども、学際的にさまざまな専門分野の人々が関わることによって、肉厚に豊かに深められてきた。それは、学閥に縛られない、公平な学術的立場に依拠したものであったという点で非常に大きな意味を持っていたというご指摘をいただいたと思います。

そのようなことも含め、さきほど申しました本日のテーマに向けて、皆さん方のご意見をお聞きしていこうと思います。まず、佐藤さんの基調講演はかなり多岐にわたり、非常に網羅的であったわけですが、追加的に言い忘れたところ、さらにはもうちょっと強調しておきたいと思われたところがありましたら、ご発言いただきたいと思います。

【佐藤（パネリスト）】

まとまりのない話になってしまって申し訳ありませんでしたけれども、言いたいことはいっぱいあったわけでありです。ちょっと補足しておくとして、これまで奈文研に関係した人、あるいは発掘調査で一緒にした人とも思いますけれども、私なども例えば奈文研と奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）とで、共同で法隆寺の防災工事の発掘をしたときに、奈文研から 1 人、私が若い頃に参加して、橿考研からは故・菅谷文則さんが参加して、



平城宮跡という広大なフィールド

他機関との共同研究、貴重な経験



2人で一つの現場を一緒に、あれは1か月ぐらいだったでしょうか、発掘したこともありまして。そういう形で共同研究を、奈文研は幾つもおられるわけですね。地方の発掘を指導という場合もありますが、一緒に調査している例もある。

それから、奈文研の埋蔵文化財センターでやっている研修に大勢の各地の

埋蔵文化財の研修

埋蔵文化財担当者が来ておられる。そういう方たちが、以前は埋文センターの研修も毎日夜まで仕事したうえで飲み会もやっていたと思います。そういう人間的な付き合いで、埋蔵文化財に関わる味方というか仲間、文化財を守ろうという共通する方向性を持つ人たちが全国にいると思います。そういう方たちとのつながりは大事でしょう。今でも奈文研は、いろいろな公的機関とも協力・連携して仕事をしておられると思うんですけれども、地元の奈良県や奈良市とかだけではなくて、全国的にそういうところがあると思います。そういう協力・連携の関係をさらに拡大して仕事や調査研究や保存活用を進めていくということが今は必要なのかなと思います。

それぞれの調査機関は予算的に、人員的に大変な苦境にある状況があるかもしれ

1 足す 1 が 3 にも 4 にもなる連携

れませんけれども、連携して力を合わせれば1足す1が3にも4にもなっていく可能性があると思っております。それができる時期だし、できるのではないかとというふうに思いました。

私、いろいろ話させていただいたのですが、あとの御三方のご報告を聞いて、自分が調査したのはこの辺りのことだなとか、整備についてもふだん考えていることは、こういう位置づけになるのだなということが分かって、今日は大変勉強させていただきました。おそらく会場の方々も、平城宮跡の過去・現在・未来について、いろいろとご理解いただけたことが多いと思ひまして、あの方の報告に感謝申し上げたいと思ひました。

【本中】

ありがとうございました。奈文研で育った我々の先輩たちが全国各地に散らばって行って、その後「大規模遺跡」と呼ばれるようになった拠点的きょてんてきな史跡においても、奈文研と同じように様々な分野の研究員が学際的な調査研究を展開していったという経緯があったと思います。

大規模遺跡 拠点的な史跡

そのような大規模遺跡のみならず、今や全国各地にはハブ的な史跡が多く存在し、様々な分野の専門家とその地域の人々との交流の中で、いろんなタイプのいろんな方法をもって保存や活用の施策が進められて調査研究が進められているということは、本当に注目してよいことなのだと思います。

ですから、平城宮跡の100年の歩み、特に特別史跡に指定されてから50年経ったという話もさきほど出てきましたけれども、長い年月の積み重ねの中で、奈文研と地域の自治体、私たちの調査研究を支えてくださった地域の皆さんとの相互交流が大きな相乗効果そうじょうこうかを生んでいるのだと

私も思っております。佐藤さん、どうもありがとうございました。

地域との相互交流が生んだ相乗効果

今日は、冒頭、研究所の職員として内田さんが平城宮跡の史跡指定の経緯について報告してくれました。実は人数の制限があって、彼にはパネルディスカッションには加わってもらうことができなかったのですが、内田さんのプレゼンテーションの中にも注目すべき情報が盛り込まれていたと思います。

明治以降、史跡指定に至るまでの先人たちの努力、保存に向けた**パワーの源泉**^{げんせん}がどこにあったのかということが、彼のプレゼンテーションからもよく伝わってきましたし、**ナショナリズム**^{ナショナリズム}の**高揚**^{こうよう}の中で、時代背景を色濃く受けて**愛国心**^{あいこくしん}や**愛郷心**^{あいきょうしん}が先人たちの熱意や努力の原動力となっていたのだと。**柵田嘉十郎**^{たなだ かじゅうろう}や**溝辺文四郎**^{みぞべ ぶんしろう}をはじめ、今でもそのご子

ナショナリズム、愛国心、愛郷心

孫の方が平城宮跡の周辺にお住まいですが、**標本**^{ひょうぼん}を保存してこられた柵田家も含め、保存のために努力を惜しまなかった先人たちの背景には時代のうねりがあり、そういうことがあったからこそ、私たちは 131 ヘクタールにもものぼる平城宮跡の価値を享受^{きやうじゆ}することができるのだということを改めて感じた次第です。

内田さんの報告を踏まえて、神野さんが戦後の奈文研の活動を大きく 6 つの時期に分けて紹介してくれました。原動力は、開発の危機に対して的確に対応しようとした様々な階層の人々の声にあり、それらが政治的な流れによってひとつにまとめられ、最終的に 131 ヘクタールにも及ぶ平城宮跡全域の保存がかなったのだということ。神野さんのプレゼンテーションからは、そのことがよく伝わってきたと思います。

発掘調査の課題と今後の展望については、神野さんのプレゼンテーションの中にヒントが隠されていたのではないかと思います。最近の奈文研では非常に財政的に厳しくなっている

発掘調査の課題と今後の展望

という事情があります。10 年前に比べますと、国からの**運営費交付金**^{うんえいひこうふきん}は半分近くに減っているということもあり、平城宮跡の発掘調査のみならず、他の分野の調査研究についてもかなり厳しい状況下で、苦労して様々なアイデアを出しながら取り組んでいるというのが実態です。

神野さんの説明では、予算規模が小さくなるとともに、発掘調査自体が持っているデメリットみたいなものもあるのだということが紹介されていたと思います。最小限の範囲を発掘調査して、最大限の成果を引き出すのだということが画面に表示されていたね。詳しい説明がなかつ

たように思いますが、神野さん、何か追加的にコメントすることはありますか。

【神野】

「最小限で最大限の発掘調査」というのは、スローガンとしてはかつて良いですけども、じゃあ、具体的に…と言われたら、なかなか難しい部分がありますね。



最小限の発掘で最大限の成果

ただ、発掘調査のやり方自体も昔と今とは、ずいぶん変わってきておりまして、例えば、土ごと持って帰って細かいメッシュで洗うと瓜の種だとか^{きせいちゅうらん}寄生虫卵だとか、いろんな細かい情報が取れたりします。発掘調査で土器や瓦を中心に研究していた時代と比べると、非常に^{せいち}精緻な研究が進んでいると思います。また、地中レーダー探査などは、昔から埋蔵文化財センターのほうで熱心に取り組んで、いろいろ改良や技術開発もされていると思いますが、まだまだ、**応用の仕方**があるのではないかな？と思います。例えば、発掘調査の^{げんじょうじばん}現状地盤で地中探査をするだけじゃなくて、遺構面近くまで掘り下げてから探査してみたら、もっと詳細に分かるのではないかと。いろいろ試そうと思いつつ、試せていないことがたくさんあります。そういう新しい取り組みを発掘調査部だけではなくて、奈文研の埋蔵文化財センターや他機関や大学などと、それこそ佐藤先生がおっしゃっていただいたような連携を取りながら、**いろんな手法を試すフィールド**として、平城宮跡の発掘調査を進めていければと思います。できるだけ少ない面積で最大限の情報を引き出す方法には、こういう方法もありますし、こういう

新手法を試すフィールド

技術もありますよというふうに、次のシンポジウムの時には、もっといろいろな具体的な方法を提示できたらいいなと思っております。

【本中】

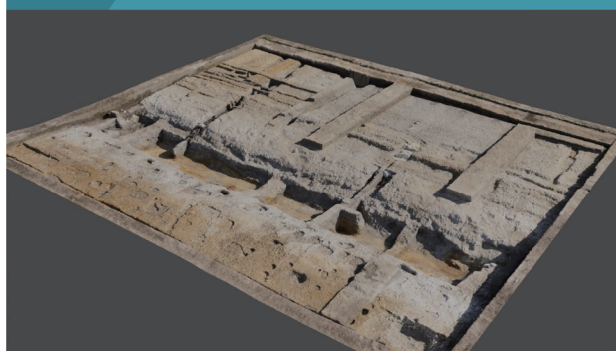
そうですか。分かりました。じゃあ、次回のシンポジウムは、それをテーマにしてやりましょうか。ありがとうございます。いったん発掘調査を行うと、掘った遺構は元には戻らないので、よほど慎重にやらないと駄目だというのが発掘調査に^{のぞ}臨む上での^{いまし}戒めであろうと思うのですね。さりとて、やはり掘る以上はしっかりと情報を引き出して、それを市民の皆さんに返していかななくてはいけないという使命もあるわけです。両方の^{あいはん}相反する気持ちの中でせめぎ合いながら、どの程度の面積で、どの程度の情報を引き出すのかということについて、常に悩みながら発掘調査に臨んでいるというのが実態であろうと思います。

今の神野さんのお話だと、都城発掘調査部では、そういうことについてかなり厳しく議論をやっているということですね。次のシンポジウムに期待したいと思います。

神野さんの説明のなかで、地下遺構の姿をクルクルと回転させることができる画像が紹介されていましたが、あれは平城宮^{とうほうかんが}東方官衙の大溝 SD2700 の^{地下}遺構の三次元モデルだったのでしょうか。非常に迫力がありました。あのような画像が現地に立って、例えばタブレットを地面にかざしたり、ゴーグルを付けたりすることによって、今は地下に埋まっていいて見えない遺構を来訪者に見てもらえるようになるといいなと思いますけれども。

【神野】

発掘現場の三次元記録



第 621 次 平城宮東方官衙地区の調査 SfM モデル
(埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室作成)

そうですね。こういう記録は基本的にデジタルデータです。その点は多分、バーチャル

デジタルデータの作成と活用

リアリティといいますか、メタバースといいますか、スマホを持って見れば、あるいはGoogleをつけて見れば、あたかも、ここで今発掘しているような仮想現実^{仮想現実}に飛び込める…比較的低コストでそういうソフトに結びつくようなデータの取り方ができているのではないかなと思います。

【本中】

なるほどね。経費がかかりますが、クラウドファンディングの手法を使うという手もあるかもしれないですね。賛同してくださる方々の力を借りて、新たな取組の成果をお返しできるようにすることも課題でしょうね。

バーチャルリアリティの手法も

クラウドファンディングによる開発

そうですが、研究所では石碑の

碑文^{ひぶん}に光を当て、タブレットやスマートフォンを用いて簡便に解説できる「ひかり拓本^{たくほん}」のソフト開発にもトライしています。そのような簡便で汎用性^{はんようせい}のある手法を多くの階層の人たちに使ってもらえるようにするために、クラウドファンディングを展開したいと考えていますので、またご協力いただければと思います。

公開・活用の取組については、岩戸さんのほうから幾つかの魅力的な考え方が提示されました。まず3つの軸があり、遺跡の「存在」、「情報」、「価値・意義」がある。標本は遺跡の「存在」を伝える一つの手法であるし、また、どのような遺跡なのかという「情報」を伝える説明板も立てられてきたわけですね。それ以外に「価値・意義」を伝えるために様々な整備の手法が開発されてきた。そして、遺跡が持っている魅力を感じ、楽しみ、体感するというのが4番目の柱として重要になってくる。今、それに対してトライしているんだという紹介があったと思います。

遺跡・史跡を体感するとは？

各地の「テーマパーク」へ行けばいろんなメ

ニューが提示されていて、それはそれで様々な

楽しめるわけですけど、「テーマパーク」とは一味違う体感の方法に関して、特に留意している点は何でしょう？「テーマパーク」を引き合いに出すのはあまりよくないのかもしれませんが、どのような点に留意しながら体感のメニューを提供していこうとしているのでしょうか？

【岩戸】

最後のほうにいろいろなイベントを写真で紹介したのですが、年齢層もお子さんから大人までいろんな方が参加されています。そこで単に楽しただけで終わって帰られると、やはりそこは今おっしゃったテーマパーク的な楽しみ方で終わってしまうのかなと思います。

やはり、そこで単に体験して終わりではなくて、私は例えば奈良時代を体験するといったときに、ちょっと旅行を例に出すことが多いのですが、海外旅行で違う文化のところに行って、そこで何か自分のいる日本と似ているところを発見して魅力を感じ、違う部分にも魅力を感じる。それが旅行の楽しみかなと思いますね。

やっぱり奈良時代を体験して楽しむといったときに、例えば人面墨書土器を書くという行為の中に、今のコロナに対して私たちが恐れおののいているという気持ちと、当時の人たちが見えない病気に恐れを抱いた気持ち、そこで同じ感情を持つ。また、今はワクチンなりマスクなりいろんな薬がある。当時はない。その違いと共通性、それぞれを比較しながら、平城宮跡の場合、

奈良時代というものの、当時の人々がどんな気持ちであったかとか、非常に抽象的な感じで奈良時代の社会や人々に寄り添って共感すると文章では書いたのですが、そういうことによって単に字面^{じづら}で奈良時代はこういう時代でしたということを知るだけじゃなくて、そこに自分を投影するような、そして知識と気持ちを両方お持ち帰りいただくというところで遊園地に行くのとは違うというふうなことを心がけてイベントを企画しているつもりでございます。



自分を投影、知識と気持ち

【本中】

なるほど。今のお話で言うと、例えば、まん延するコロナウィルスが私たちの生活を一変させましたよね。コロナに悩まされている私たちと比較して、奈良時代の疫病に対する人々の悩みや苦しみ、知恵などを知ることのできるメニューなどは何か考えているのでしょうか？

【岩戸】

人面墨書土器を描くときにも、単に土器の説明、どこから出ましたとか、こんなふうに変化してきますという事実だけではなくて、今お話ししたような視点もきっちり伝えるような解説をやってから、体験をしていただくというようには心がけています。

【本中】

往時の社会の実態を確実に体感

なるほどね。やっぱり信頼性のある事実に基づく情報を提供することによって、往時の社会の実態を確実に体感できるようにしたい、ということなのですね。そういうことがその疫病の問題にも現れていると。

【岩戸】

そうですね。

【本中】

神野さん、どうですか。あなたは当時の疫病に関する研究をやっておられたと思いますが。

【神野】

新型コロナウイルス感染症 Covid-19 が日本でも社会問題になりはじめた時に、平城宮跡資料館でミニ展示「古代の祈り^{えきびょうたいさん} 疫病退散展」というのをやらせていただきました。本当に皆さんの関心がとても高くて、私たちもびっくりするくらいでした。中でも印象的だったのは、「これまで、あまり歴史には興味がなかったのですが、これは観に来ました」とか、ふだん来られていないような方々が平城宮跡に来ていただくきっかけになったという話をよく耳にしました。なぜ、そんなに関心が高かったのかというと、人間というのは、今直面しているものを理解したいとか、昔の人はどう対処していたのか知りたいという本能的な欲求があるのだらうと思いました。

歴史を知ることによって現代の人々が精神的な安らぎをえることができる、それを求めて歴史を学びに

現代社会のニーズに敏感に

くる人がいるということは、裏を返せば、その安らぎや学びを提供する役割が我々の使命の一つなのだろうと自覚するきっかけとなりました。

現代の人々に寄り添う歴史研究

疫病だけに限らず、例えば地震があったときには、この地域の罹災^{りさい}の履歴を知っておきたいとか、それを乗り越えた歴史を知ることで勇気をもらいたいとか、現代の人々に寄り添う歴史研究のあり方というのを、私たちはもっと追究できるのではないかと、というふうに思っています。

【本中】

なるほど。非常によく分かりました。今の2人の話を聞いておられて、佐藤さん、どうでしょうか。何か感じられることがあるでしょうか。

【佐藤】

今、現役の方たちが、いろいろ素晴らしく、これからのことを考えておられるなと思いました。今の疫病に対する古代の人々の祈りみたいなことも、文献にも残っているし、いろんなかたちで残っています。天平9年(737)のたいへん大規模な天然痘の流行で、大勢の人が日本で亡くなり、藤原四兄弟をはじめとした政界の中心人物も1年の間にバタバタ倒れたということが、よく古代では取り上げられます。この時も地方に対して、律令政府がこういう対応をしろと命じている太政官符を見ると、今でいう「3密を避けなさい」みたいなことも、あと「体を温めなさい」というようなことも書かれています。それなりに古代は古代なりに、ある意味、合理的なこともやっている。一方で、今でも私たちは神頼み、仏頼みもやっています。どの程度、日本人が1300年前から進化しているかというのを考える糸口とし

疫病は歴史を考える糸口に

ては、私は良いかなと思いますね。

例えば100年前にスペイン風邪が流行ったときと、今同じようなことをやっているのです。菊池寛という人が『マスク』という小説を書いているんですが、その小説はスペイン風邪がはやってきたときに、だんだんとみんながマスクするようになってきて、マスクしていない人をみんながじろじろ見詰めるようになってきた。ところがそれが収まってきたら、今度はだんだんマスクを外す人が多くなって、自分は絶対マスクするぞとがんばっているんだけど、自分が一人だけマスクしていると何か目立って、外さなくちゃいけないのかなという状況になってくるといふ小説を書いています。

私はそれを読んで、100年前と今の人間もそんなに変わっていないなと思いました。それを含めて歴史を考えると、時代ごとにどういうことをやってきたかということは、ぜひ対照していただければありがたいと思います。

【本中】

ありがとうございました。100年前の話も含めて、1300年前の人々がどのよう

遺物が語る背後の物語を伝える

に疫病に向かっていったのか、悩み、悲しみ、つらい思いをしたのだということは、いろいろな出土品からもうかがい知れるのだと思いますので、遺物が語る背後の物語は私たちがしっかりと皆さんにお伝えしていかないといけないということですね。そこが大切な点かなと思いました。

マスコミは常に切った張ったの緊張感が満ちた世界なのでしょう、ジャーナリストの中村さん。今の2人の研究員の発言その他を聞いて、どんな印象を持たれましたか？

【中村俊】

私は切った張ったの世界もやってきました。研究者ではないので、いろんな社会の中で遺跡というのを見るわけですが、先ほど岩戸さんの報告の中で、活用という話がありました。先ほど、活用ってどうすればいいのか？、なかなか難しいけれども、文化財保護法の改正の中で、今、どんどん歴史遺産を活用してい



こう、使っていこうという流れがあると。その中で、やっぱり、活用ってどうすればいいのかな？というふうに思いますね。単純に観光、これも活用の一つですし、地域おこし、これも活用の一つだと思うのですが、やはり文化財保護法の中には、「保存」と「活用」って常に「保護」の意味の範疇にあるのだよと。ここの奈文研の大先輩の九州国立博物館の館長だった三輪嘉六さんは、よくおっしゃっていました。

そこで、じゃあ、具体的に活用をどうすればいいのかと。いろんなパターンがあると思います。いま言ったような経済的な事情もありますが、私がやっぱり思うのは、文化財保護法の改正のもう一つ大きな流れで、地元の財産、本当に小さなものから大きなものまでいろいろあると思うのですが、うちの地元、地域にはこんなものがあるよねということを感じさせること。なかなか気づいていない方々もたくさんいらっしゃるって、私もそうですし。それを活用の方向性というものが盛んになって、そして地元の遺産がこんなにたくさんある、じゃあ、大事にしくちゃいけないと。これは経済的な金銭とか、そういうものは伴わないものかもしれませんが、これを無形のかたちで気づいても

らうということ、これも重要な、**人々に気づいてもらうのも重要な活用**これこそ重要な活用の成果なんじゃないのかなとも思うのです。

きっと日本中いろんなところ、市町村の中にいっぱい財産があるわけですが、じゃあ、平城京はどうか。これはもう本当に日本の首都だったところですよ。だったら、これはもう地域の財産を超えて、私たち日本に住む日本人、国民といいましょうか、それ全体の地域の財産だということを、そこまで敷衍させて気づいてもらう、本当に貴重な、おそらく平城宮とかこういう国レベルのものしかないような遺跡、そういう意味でとても貴重なものだと思うのです。

活用をするにはどうすればいいのか。この間の天平祭、とても晴れた日に、あれは5月でしたっけ。私ものぞいてみました。衛士の行進とか、朱雀門広場の前でやっていました。これも一つの活用ではある、とてもいいことだと思います。

やはり埋蔵文化財の中で、舞台装置として、そこは朱雀門が復原されていますよね。そして、第一次大極殿が復原されています。あと南門も最近、できましたし。こういう復原建物があつてこそ、私も歴史遺産の中にいるなという、そして歴史を大事にしたいなと思うような気持ちが芽生えるというのも確かだと思います。

舞台装置としての復原建物

縄文時代とか弥生時代とか先史時代の佐賀県

よしの がり
吉野ヶ里遺跡とか、そこで復原建物が建っていますが、私は新聞記者をやっていますと、それに対して、いろんな意見があると感じます。先史時代のものだから目に見えない、見たことがない…当たり前ですよ。でも、復原して造る。研究者によっては、かなり誤った、まだ学術的に確定していない姿を復原するのはどうだろうか？という方々もいると思います。しかし、私はある程度、ビジュアル的なものは、やはり必要だと思います。



平成 22 年 (2010) の平城遷都 1300 年
(2010 年 10 月撮影)

おそらく、平城宮でも『^{ねんちゅうぎょうじえまき}年中行事絵巻』とか、それほど豊富には史料はないとは思いますが、それでも復元建物がある、それを見るときインパクトの大きさというのはとても大事なものだと思います。

ただ、先ほど A R とか V R とか、最近は拡張現実というのですかね。そういう機能の中で、もし復原建物も可能ならば、まだまだ分からない部分もあるけれども…というような意味も含めてそういう V R とか A R とかも使っていけば、より学術的にも、あるいは私たちが見るとき活用の中でも、妥協点を探りながら、うまく共存していけるのではないのかなと思います。

デジタル技術も併用した建物復原

特に平城宮というのは、前半と後半とで、ずいぶん姿が違います。建物復原はある一時期の姿しかできないわけですが、こういう最新の技術を使えば、時間によって平城宮の姿が変わることをうまく表現できるのではないのでしょうか。これも一つの科学技術の活用だと思いますよね。

例えば、古墳などでも、兵庫県神戸市の^{ごしきづか}五色塚古墳のように築造当初を復元するのか、あるいは^{うまみ}奈良県馬見古墳群のナガレ山古墳なんていうのは、おそらく半分は造営当初、半分は後の時代の姿を復元しているように、いろいろな復元の仕方がある。時間の切り方がある。どのような時間軸で切っていくのか？というのは、皆さん悩まれるところだと思いますが、今のような V R 技術とかを駆使して、さらにリアルな実大の復元建物と組み合わせていけば、私はこれから平城宮のいろんな隠れた潜在的な可能性が、たくさんどんどん利用できるのではないかと思います。そして、それが地元の、あるいは日本全体の皆さんの平城宮を大事にしていこうという気持ちにつながっていくのではないのでしょうか。そして、それがまた保存につながっていくことを先ほどの報告を聞きながら思いました。ちょっと長くなりましたが、一気に言っちゃいました。

【本中】

どうもありがとうございました。建造物の復原の話を始めると、1 時間、2 時間ぐらゐの議論でも結論は出ないのかもしれないですが…。今、中村俊介さんがおっしゃった内容で、大体バランスのいい捉え方になっているのではないかと私は思いましたけれども。

復原にはお金がかかりますし、平城宮跡の全体を復原しちゃおうなんていう大それたことはみ

んな考えてこなかったのだと思います。60 年代の初めに今の近鉄線の南側に検車区を造ることが発表され、地元でもかなりもめた。地元の農家は土地を買ってほしいという強い気持ちを持っていたし、その方向に平城宮跡の保存が大きな障害となると言った人もいたと思います。それでも、やっぱり国民的な運動の中で**全域の史跡指定**にまで発展していった。

その過程で議論になったのは、**将来の平城宮跡**をどのようにするのかということであり、当時の新聞にはアンケートによって様々な階層の人々の意見をまとめた記事が載っています。その中には、復元はやっぱりやるべきだと。それは遺跡を活用していくうえ上でどうしても必要なのだと言った人もいたし、いや復元などもってのほかよと。今あるがままの姿で残しておくべきであるということと言った人もいた。でも、宮跡はこんなにも広いのだから、部分的な復元はいいのではないかと言った人もいた。

その辺はバランスの問題だと思いますけれども、山下さん、文化庁としては昭和 53 年（1978）に**基本構想**を出されて、その中でも**建造物の復原の方向性**を示してこられた。そして、この後、国営公園事務所の中村さんにもお尋ねしますけれども、建造物の復原事業は国土交通省へと引き継がれたわけですね。山下さんと中村さんは、それぞれ平城宮跡の全体プランニングと現時点での建造物の復元のあり方について、どのように捉えておられるでしょうか？

【山下】

文化庁の山下です。平城宮跡は今日いろいろ既にご説明ありましたように、世界に誇る国民的な文化遺産でございます。文化庁では、岩戸さんのご報告の中にもご紹介ありました昭和 53 年（1978）に文化庁としまして特別史跡の平城宮跡の**整備基本構想**、いわゆる**遺跡博物館構想**というふうに呼んでございますけれども、平城宮跡を遺跡博物館と位置づけまして、3つの機能を基にしまして整備を行っていくという基本方針を示しております。



1つが、国民の各層皆様が**古代の都城文化を体感的に理解**できる場とすることです。それから、こういう平城宮跡、宮跡を中心とします調査研究を向上するような研究拠点とすること。それから、これに関わりますけれども、全国の遺跡や遺物の保存修復、それから整備に関しまして技術開発や技術を蓄積する場としてこれを位置づけるといったようなことを大きく示してございます。これに基づきまして、文化庁（独立行政法人）なるまでは奈文研）で整備を実施してきまして、**大極殿**ですとか**東院庭園**とか**朱雀門**とかを整備をしてきたところでございます。

古代の都城文化を体感

その後、様々な状況の変化の中で国土交通省さんによります国営公園整備としての手法も入れて、国営公園としての整備を順次進めていくということになったものです。遺跡博物館構想については、私ども平成 20 年（2008）には博物館構想をさらに推進しようという**推進計画**というのをつくっておりまして、国土交通省の公園計画の中でも、これをご参考にいただいている

というふうに承知をしています。

昭和 53 年（1978）につくった**博物館基本構想**は、まだ**全然色あせていない**というふうに思っております。引き続きこの基本構想で挙げました基本方針にのっとって、さらに具体的な推進を平城宮跡で図っていくということがとても大事だと思っております、当然、奈文研、国土交通

遺跡全体を博物館にする構想を推進

省、地元奈良県、奈良市などの関係機関とも連携協力して、特別史跡であり**世界文化遺産**であるたぐいまれな**国民的文化財**である**平城宮跡**、今後も整備活用していくことが必要だというふうに考えております。

【本中】

ありがとうございました。中村さんは、いかがでしょうか？

【中村孝】

国土交通省の国営飛鳥歴史公園事務所長の中村と申します。飛鳥歴史公園と平城宮跡歴史公園と双方の公園を整備、管理させていただいております。

私も国土交通省としましては、これまではずっと文化庁、奈文研が、いろいろと携わってこられた平城宮跡に参入させていただいたのは、区切りとしては平成 20 年（2008）に国営公園として事業化されたというところだと思っております。これは閣議決定ということで設定されたんですけども、国家的な記念事業として、または我が国固有の優れた文化資産の保存、活用を図るために国が設置する都市公園ということで定められ、それから国交省として、国営公園担当部局として整備管理させていただいているという状況でございます。

私も整備させていただく際には、通常工事ですとやっぱり計画があり、調査設計があり、工事と段階を踏んでいくのですが、おのおのの段階でやはり国交省ではなかなか文化的ないろいろな史跡の状況とか、文化財としての重要性とか承知していない状況の中ですごく携わっていただいていると。例えば、設計の段階で、学識者の皆様に加わっていただく委員会を立ち上げて、その場に先生方に参画していただいて、それで専門的なご意見をいただくと。そういった中で設計、

各段階で専門家の意見を反映する必要

工事等に反映して造っていくというようにことをさせていただいて

おります。

少し公園のいろいろな機能等も併せてご紹介をさせていただきたいと思っておりますが、基本方針としてはこの公園は、当然、古代国家の歴史文化が重要視されていて、そういったところを体験したり体感したりすることを目的としていたり、古都奈良の世界遺産としての**歴史文化**、そういったものを知ることができる**拠点**であると。そういった公園づくりをしていくというようなところがベースにはございます。

一方で、**観光の拠点**として、観光ネッ

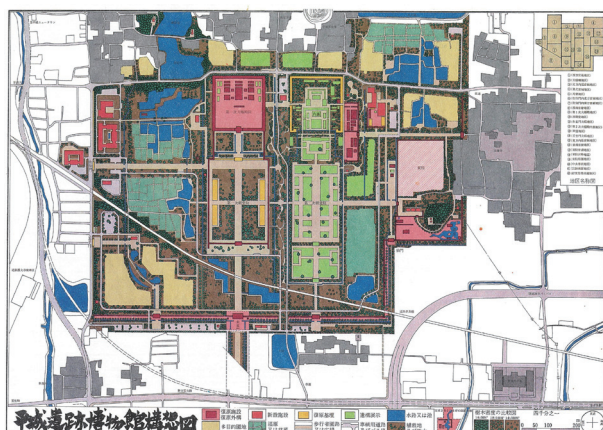


トワークの機能を持っているということもありますし、自然的環境の保全、創出、そういった機能も持っている。あるいは、レクリエーション機能も持っているという、様々な多くの機能を持った公園として整備をしていくというところではないかと感じておるところでございます。

【本中】

お2人とも国の行政官でいらっしゃるから、やや教科書的なお答えだったかなという気もしますが、バランスのよいコメントをいただいたのかなと思います（笑）。

神野さんと岩戸さんの発表の中にも「平城遺跡博物館構想」の図面が出てきましたね（右図）。図中に赤く塗られていた部分が、往時の建造物を復原する範囲だったのですが、その後、復原の対象とする範囲や考え方が少しずつ変化してきたということがあるのですね。



平城宮跡保存整備基本構想資料 昭和53年（1978）3月
奈文研『平城宮跡整備報告書』、2016年より

客観的な事実に基づいて建造物を復元するとしたら、どこまでが可能なの

か、どこから先が様々な関連情報を踏まえないと往時の姿を想定することができないのか、ということについては、研究所の建築史を専門としている研究職員がかなり突っ込んでいろんな調査研究を継続し、その成果をここ20年から30年の間に非常に分厚い報告書にまとめ、公開しています。

そのようなプロセスを踏んできたからこそ、朱雀門、大極殿、そして東院庭園も復元できたのだということでしょう。100%の直接的な根拠を示した建造物の復元はあり得ませんから、建造物として全体をまとめ、活用のためにどの部分をどのように推測して造るのかということも含め、両者の境界を明らかにするための調査研究をおこなってきたのだとらえています。

神野さん、そのあたりはどうでしょうか？ 都城発掘調査部の中で、建築史分野の研究員たちは復原についてかなり一生懸命やっていると思うのですが。

【神野】

そうですね。遺構研究室という^{うわや}上屋の建物を考える研究室がありますが、佐藤先生からもご紹介いただきましたけれども、文字の専門家とか、建築の専門家とか、考古学の専門家とか、異なる分野の専門家がチームになって発掘調査をするというのも、奈文研においてはほかにはない特徴だと思います。遺構研究室を中心に、かなりの回数の検討会を重ねて、復原建物というのは検討されています。

例えば、瓦の専門家がこの瓦がここから出ているとか、この場所から瓦が何キログラム出ているとか、そういう細かい研究を積み重ねて、あの復原建物になっているということ、そのこと自体も皆様に分かりやすくお伝えしてきたつもりですけれども、これからはもっと分かりやすくお

伝えをしていきたいというふうに思っております。

【本中】

ありがとうございました。今のお話も含めて、山下さんや中村孝さんのほうから情報提供あったように、プランに基づいて、将来の望ましい姿、全体像を思い描きながら、時間をかけて合意形成を図りながら、建造物の信頼性の高い復元や

遺構の環境整備、活用の事業を進めてきた、というのが現在の到達点なのだろうと思います。

文化庁だけではなく、現在では国交省が中心部分の整備事業を進めておられますし、平城宮跡の南のほうに目を向けると、「平城宮いざない館」という国営公園施設があります。これはとても素晴らしい情報発信施設だと思いますけれども、それ以外にも奈良県が設置された「天平うまし館」でしたか、レストランや物販施設もあります。また、大宮通りを南にわたりますと、奈良県が駐車場を造ろうとされていますよね。奈良県では、もともとは平城宮跡を残すために奈良県知事が奔走されたという歴史的な事実もあり、平城宮跡こそは我々のものだというふうに思っておられる部分もあるのではないかと思います。だから、宮跡の周辺の区域においてしっかりと施設整備をやっていくのだという強い気持ちを荒井知事もお持ちなのだろうと思います。



朱雀大路をはさんで右側に「平城宮いざない館」、左側に「天平うまし館」など（2018 年撮影）

先ほど内田さんのほうからの報告にありましたように、戦前から史跡地の買上げ等による保存について、県もいろんなかたちで関わってきました。その活動自体は戦後も続いていて、主要な部分は大体買上げは終わっていますが、今後も土地の公有化、それから史跡地の保全という面についてしっかり関わっていききたいと思っています。

それからもう 1 点は活用の関係です。皆様ご承知のように南門—大極門—が完成して、大極殿と南門と朱雀門が 3 棟並び建つようになりました。やはり、その 3 棟が



第一次大極殿院の瓦の検討会（2014 年撮影）

と施設整備をやっていくのだという強い気持ちを荒井知事もお持ちなのだろうと思います。

今日のご登壇いただけなかったのですが、会場には奈良県理事の武内正和さんがお越しですので、そのあたりの現在の情報提供も含めてコメントをいただけるのでしょうか。

【武内】

奈良県の文化・教育・暮らし創造部の武内と申します。

まず 2 点、お話ししたいと思います。

1 点目は史跡の保存に関するお話で、

平城宮跡保存に奈良県が果たす役割

並ぶことによって南北軸がしっかりクリアになったと私は思っています。2棟だとなかなか十分じゃなくて、やっぱり3棟できることによって、古代寺院の伽藍がらんもそうですが、軸がしっかりします。そうしますと、南北軸がしっかりできることによって、一番南側の広場部分の重要性もまた増してきていると思います。その部分、広場であったり、場合によっては、にぎわい空間、門前町的な、そういったイメージもあるかもしれません。



先ほど、本中所長からご紹介がありましたように、既にいくつかの施設ができておりまして、それと一方で大宮通りの南北に県で整備しているエリアがあり、既に稼働している施設もあります。南側は仮の駐車場になっていますが、これからじっくり議論をした上で、整備していくことになると思います。

これまでも国交省とか文化庁、奈文研と協議しながら、整備方針を考えてきておりますし、一方で先ほど岩戸さんの報告にありましたような、ソフト関係でいかに見せるか、いかに理解してもらうかも大事です。やはり史跡の価値を守りながら、一方でいろんな世代の人に来ていただけるような誘引力みたいなものも備えるような空間を整える必要があると思います。

ちょっと議論に水を差したことがなければいいと思いますが、よろしくお願いします。ありがとうございました。

【本中】

いいえ、そんなことはありません。ありがとうございました。一番大切なことは、文化庁、国交省、そして奈良県、調査研究の観点から奈文研ということで、それ以外にも会場内にはおられるかもしれないですが、奈良市も関わるわけですね。また、地元には保存・活用に関わるNPO法人やボランティア団体などもあります。それらの組織間での議論やコミュニケーションを円滑に進めることは、とても大切だと思いますので、奈文研でもしっかりフォローしていきたいと考えています。

武内理事からもお話があったように、役割分担の観点でちょっと気になっているのは、国営公園の施設として「平城宮跡いざない館」という展示館があります。あそこはとてもよくできていると思う一方で、奈文研の展示施設である「平城宮跡資料館」は結構老朽化してきているということもあり、展示に関わる役割分担をどのように行うのがよいのかという課題もあると思います。その点、岩戸さんはどうあるべきだと考えていますか？

【岩戸】

いざない館がオープンして4年たったところですけども、実はいざない館を入りましてすぐの部屋、本当に名前のとおり、平城宮にいざなうということで、歴史だけではなくて自然のことなど、本当に平城宮を含むいろいろな要素を紹介する展示室から、ちょっと奥へ行く

平城宮跡資料館との役割分担

と平城宮のジオラマがあります。結構多くの方がそれを見ただけで帰ってしまいます。これが非常に私は悲しいのですが、さらにそこから渡り廊下を渡った一番奥に展示室 4 というのがあります。そこに奈文研のこれまでの調査の非常に重要な遺物が展示されています。少し奥まわっていて、結構な方が途中で帰ってしまうのです。それをなんとか改善したいと今思っています。

実はそのいざない館がオープンするときに、平城宮跡資料館の中核をなしていた展示物の大半がいざない館に移動して、その展示室 4 に行っております。私は当時、都城発掘調査部にいましたが、その後、平城宮跡資料館をどうしていくのか、議論をしないといけないという話も出たのですが、議論が進んでいません。私個人としては、どちらかというとな文研の出土遺物だけに頼らない、奈文研の最新の調査成果にフィーチャーした、そういう意味で**すみ分け**をするべきと考えています。はからずも昨年から企画展がかなり歴史研究室であったり、地震のことを研究している部門であったり、出土遺物に頼らない企画展が続いていることもあります。そういうすみ分けが、今後はもう少し明確になっていくのかと思ったりもしていますが、これは私の頭の中だけの話です。

両館の役割分担は今後の課題

いずれにしても、いざない館の学術的な展示室、学術的な部分というのは奈文研のほうで受託という形で受けておりまして、奈文研のほうでサポートといいますか、新しいリニューアルであったり、学芸的な業務、学術的な面のサポートというのはいざない館も開館当時からずっとさせていただいております。

【本中】

なるほど。ありがとうございます。中村さん、どうでしょうか？

【中村孝】

私もちょっと同じようなことを申し上げるかもしれませんが、私なりの言葉で申し上げたいと思うんですけれども。国土交通省と奈文研の役割分担のお話を中心にと…思うんですけれども、私どもは都市公園部局ということで、公園に来られる皆様にサービスを提供する、楽しんでいただくとか、そういうところが非常に強いです。つまり、国土交通省として公園サービス、利用者の方々に、歴史にまずご興味を持っていただくと。入り口の部分ですね。そういったところの役割かなと思っております。

世の中全ての人が歴史に興味を持っているわけではないと思いますので、ご家族連れとか本当に気軽に公園に来られている方も多いと思います。そういった方々に少しでも歴史に興味を持っていただくところに力を入れていくのかなというイメージを持っております。

その上で、たぶん奈文研さんに引き継いでいくとか、興味を持っていただいた方にさらに歴史に詳しく、より深く学んでいきたいと思われる方になってくるといいますんで、そういった方々に深く学んでいただく際のいろんな発掘の資料とかを奈文研さんのほうでいろいろご紹介いただくという、そういった流れになっていけばいいのかなというのが私なりのイメージを持っているところです。

いざない館もそのイメージを持った形で展示はさせていただいているのかなというふうに思っております。最初、導入、いざなって、いろいろ見ていただいて、興味が増し

国土交通省の整備はきっかけづくり

てきたところで奥のいろいろな木簡とか展示物を見ていただくと。さらには、資料館のほうに行ったらもっとすばらしいものがあると思うんですけども、そんなイメージかなと。ただ、それは明確に分けられるものでもないですし、お互いに**相乗効果**で学ぶところは学ぶということも併せて必要なのかなというふうに思っております。

【本中】

わかりました。ありがとうございます。南正面の入り口のほかに、西北方には平城宮跡資料館がありますが、おそらく近鉄大和西大寺駅から歩いて来られる人が中心になるのだと思うのです。

南正面の入り口には、大型バスなどで大挙して来られる方が多いのではないかと思います、平城宮跡資料館には家族連れや夫婦連れ、あるいは1人で来られるなど、来訪者のグループの人数に違いがあるのではないかと思いますので、今、中村さんが仰ったように、**役割分担のもとに相乗効果を期待**

これに関しては、おそらく皆さんもご意見があるのではないかと思います。このような方向もあるんじゃないのというようご意見については、随時、奈文研や国営公園事務所のほうにお寄せいただきたいと思います。

もう1点、私のほうから話題提供したかったのは、国連が掲げるSDGsというテーマについてです。皆さん、ご存じでしょうか？「SDGs 2030」。2030年までに、「世の中の誰ひとりとして置き去りにしない、そのような社会をつくっていこう」というキャッチフレーズのもとに17のゴールと169のターゲットを掲げ、右肩上がりの「持続的」な成長のパターンを展望するのではなく、波がありながらもいかに「持続可能な」社会を維持していけるのかという考え方ですね。

確か、今日の岩戸さんの説明の中にも、それに近いフレーズがあったように思います。人間のいろいろな属性、年齢・性別じゃなく、何でしたっけ、もうひとつありましたよね。ちょっと補ってくれませんか。

【岩戸】

年齢、職業、国籍、それだけにかかわらず、いろいろな立場の方が平城宮跡というものを楽しんでいただけるようなソフトを提供していきたいということですが、SDGsの中には**適切な教育**とか**情報提供**というゴールもターゲットとしてあったと思いますので、そうした中には含まれるのかなというふうには理解しております。

子供さんでも大人の方でも、大人の方でも先ほど中村所長もおっしゃられたように、歴史に興味のない方もある方も、すごく詳しい方も、いろんな方がいらっしやると思うんですけども、一つのイベントの中で全ての方にご満足いただくというのはなかなか難しいと思いますが、例えば**多言語化**も外国の方に対しての一つのサービスであります。

それから最近では、昨年、国からの視察もあっていろいろアドバイスを受けたのですが、最近特に**ユニバーサルな視点**、**対応**が求められています。今までは、身障者の方対応ということ、どうしても車椅子の方をイメージしてしまってきたところが否めないのですが、目が見えない方とか、耳が聞こえない方、耳が聞こえない方は読んでいただいてご理解いただけるのかもしれませんが、

目が見えない方、あとお子さんの中
で発達障害のある方とか、そういう

ユニバーサルな視点、対応が必要

方にも楽しめるような工夫をなささいというようなアドバイスも受けたりしまして、そういう視点も今後はできる限り努力して取り込んでいかないといけないのかなというふうに思っております。

【本中】

様々な目的のもとに平城宮跡を訪れる人々がいるということですから、多様な目的に対して、私たちは丁寧に準備していかないといけないと。平城宮跡に関わる複数の機関や団体がありますから、それぞれ情報共有しながら準備していかねばいけないということですね。

最後に、中村俊さんと佐藤さんのほうから簡単にコメントをいただきたいと思います。

【中村俊】

少々、教科書的じゃなかったかもしれませんが、簡単に手短かに言います。私が思うのは、こういう新聞記者なんてやっていると、本当に遺跡って残すべきなのか、残すことは正しいのか、もし正しいんだったら、どういう理由で残さなくちゃならないのかということをよく考えるんです。ちょうど 10 年前の今日、広島県の鞆ノ浦^{とものうら}というところで、橋をかける計画が、環境保全の観点から橋をかけないということになりました。その時にも、将来のために環境を残したいのは分かるけれども、生活も大事なんだという声やはりあるんですね。

なぜ残さなくてはいけないのか？

おそらく、この平城宮でも、そういう
声があったということを歴史的な中で聞

いていますし、いろんなところでいろんな価値観がある。残すべきだ、残さないべきだというような価値観がいろいろある。時代によっても全然違いますし、今も両方共存しているところはあ
ると思います。

だったら、私たちはなぜ残さなくてはいけないのか？ということをよく考えなくちゃいけない。その答えが出たときに、強烈にボトムアップして、おそらく遺跡を残していくという意思が強
くなっていくんじゃないのかなと。きっと、平城宮もずっと残ると思います。

最後に、わたしは九州にいたものですから、そこには史跡大宰府跡がありまして、九州歴史資
料館があります。そこに昔、行ったときに大きな顔写真のパネルがあって、故・藤井功さん^{ふじいさお}とい
う方だったんですが、まさに奈文研の大先輩で、福岡県に移られた方だったんです。やはり大宰
府跡でも高度成長期に、史跡になるときに反対運動があったりしたそうですが、藤井さんが一升
瓶のお酒を持って、ずっと地元の方々を説得されたという話をよく聞きました。

おそらく棚田嘉十郎さんもそう
だったでしょうし、いま奈文研で

新しい成果と情報を届けて理解を得る

発掘をやっている皆さんも、きっとそういう気持ちでやっていたらいいと思います。
そして、新しい成果がどんどん出たら、私たちが報じます。皆さんの元に新しい成果と情報を届
けて、そしてなぜこの平城宮というのはこんなにすばらしいということを皆様で実感してもらっ
て理解してもらったら、私もそれに勝るものはないと思います。

それがおそらくこれから未来永劫、平城宮というものを残していく底力になるんじゃないのか
なと思って聞いておりました。

【本中】

ありがとうございました。

【佐藤】

今日は、特別史跡平城宮跡の史跡指定 100 周年ということでもあります。文化庁が示している史跡の指定基準には、我が国の歴史を正しく理解する上で欠くことのできない遺跡、これが史跡になって、その中の優れたものが特別史跡になるというようになっています。つまり**我が国の歴史を正しく理解する**というのが、私は**史跡の整備や活用の目的**ではないのかなと考えております。

整備・活用の目的は歴史の理解

ですから、奈文研の仕事もそうだし、国営歴史公園としても、平城宮跡というものをここで理解していただけるようなかたちで、それぞれいざない館でも資料館でも展示していただいたり、来られた方に対応できればいいかなと思っております。

遺構は保存したうえで建物を復原

それから、2 点ほどちょっと気づいたことをついでに申し上げると、1 つは、復原建物の場合も一応、**地下遺構を保存**しながら、盛り土して建てているので、遺跡を壊して上に建てているというのではないということを、補足しておきます。**可逆的な整備**をしているということで、それを建てることによっていろいろな意味での建築史を含めた歴史学や考古学の研究が進むという面もあると捉えていいものか思っております。それは日本古代の都城というものがこういうものだったということを理解していただくのに資するということで、今日復元されているというように思っております。

それから、**国交省の国営歴史公園と文化庁、奈文研が協力**していただ

協力のもと、整備活用していくべき

きたいということを、ぜひお願いしたいところです。それから、もちろん**奈良県や奈良市**とも協力していただきたいということです。私が最近、熊本城や水前寺公園などの熊本の史跡・名勝と公園の在り方を考えたときに、ちょうど大正 8 年（1919）に旧法の「**史蹟名勝天然紀念物保存法**」ができるんですけれども、同じ頃に「**都市計画法**」も日本で導入しておりまして、そこで**風致計画**、それから**公園計画**もしているんですね。熊本の場合は、熊本城も公園にしたいけれども、これは史跡で保存していくから史跡にしましょうと。水前寺、江津湖というきれいなところは風致・公園でやりましょうと。ここでは、非常にうまく公園と史跡がタイアップして、計画段階から一緒に仕事をしているということです。なぜかな？と思ったら、おそらく当時はどちらも内務省の仕事だからなんです。具体的には内務省の出先である熊本県がやっていると思いますが、文化財としての史蹟名勝天然紀念物保存法も、当時は内務省でやっておりました。だから、同じ**内務省**という役所が**史跡や文化財もやるし公園や風致地区もやっていた**。ですから、その中で一緒に、同じ人たちが同じようにプランをたてていたのですね。

だから、私はできれば国交省も文化的な事業をやっていただきたいし、奈文研もいろんなノウハウを公園にも提供していただくようなことで**協働**してやっていただければありがたいと思います。そういう意味では、最後にお話があったように、文化財の仕事も、公園の仕事もそうだと思いますけれども、人によるのではないかなと思います。ぜひ、奈文研でいえば今日報告してくだ

さったような職員の方の能力こそが大きな財産であると思いました。その力をさらに高めていただけるとありがたいと思いました。

【本中】

ありがとうございました。中村俊介さんと佐藤さんのコメントの中に、今後、私たちが肝に銘じながら、やっていかなければいけない様々なヒントが込められていたように思います。

もう時間がオーバーしているようなので、これ以上続けるわけにはまいりませんが、次のテーマも出されましたし、このような議論の場をできるだけ準備して皆さんと対話していきたいと思います。

今日は司会の時間配分が稚拙で、会場の皆さんからご質問やご意見を賜る機会をつくることができずに大変申し訳ありませんでした。次回、もしもこのような機会があるとしたら、皆さんにも発言していただけるよう努めたいと思います。

今日は、長時間にわたりまして、ご清聴ありがとうございました。

これからも奈文研をよろしくお願いいたします。

パネラーの皆さんも本当にありがとうございました。